

S. ブラント 『阿呆船』 „verachtung der gschrift“ （「聖書を侮ること」）注解

大 島 浩 英

アルザスの人文主義者・詩人ゼバスティアン・ブラントによる風刺詩集 Das Narrenschiff（『阿呆船』）が、1494年にバーゼルで発行された。当時のヨーロッパ社会で公序良俗から逸脱した愚行を行う多くの人々を、中世ヨーロッパのキリスト教的倫理観から戒めた112の詩がこの詩集には収められている。本稿では、ある程度標準化された初期新高ドイツ語のアレマン方言で書かれた本詩集の第11章を読みながら、中高ドイツ語から新高ドイツ語へ至る過渡的な言語状況を若干考察してみたい。なおこの詩は一行に揚格（Hebung）が4つあるヤンブス（Jambus）で、二行一組で脚韻を踏むクニッテル詩句（Knittelvers）で書かれている。本文の和訳では韻律に関係なくできるだけ逐語訳を行い、また原文には5行ごとに行数を付した。またテキストの書記法には揺れがあり不統一で、現代語のつづりとは大きく異なるため誤記と思われるものも多く見られるが、すべて原文のまま記載した。

使用テキスト

原文：

Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Studienausgabe. Hrsg. von Joachim Knappe. Stuttgart 2005. (Reclams Universal-Bibliothek Nr. 18333) S.143-145.

次の各テキストに付された注釈を適宜参考にした。

Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Hg. von Felix Bobertag. Berlin u. Stuttgart 1889.

(Deutsche National-Litteratur. Hg. von Joseph Kürschner, Bd. 16) S.34-36.
Zarncke, Friedrich: Sebastian Brants Narrenschiff. Leipzig 1854. (Hildesheim 1961) S.319-320.

略語：

mhd.:Mittelhochdeutsch 中高ドイツ語、frnhd.:Frühneuhochdeutsch 初期新高ドイツ語、nhd.: Neuhochdeutsch 新高ドイツ語

本文中の Knape、Bobertag、Zarncke に関する記述は、すべて上記文献からの引用である。

[11] (題詩)

Wer yedem narren glouben will	あらゆる阿呆の言うことを信じようとする者は
So man doch hort der gschrift so vil	聖書の多くのこと(教え)を聞いているのに
Der schickt sich wol jns narren spil	阿呆の戯れ(愚行)によく馴染む

題詩1行目の wer は現代語と同様、不定関係代名詞として用いられており、後行詞として3行目に指示代名詞 der が挿入されている。yedem の語頭文字は、mhd.i、nhd.j の代わりに y で表記されており、これに続く narren は、男性弱変化名詞 narre (1格) の単数3格である。frnhd.glouben は nhd. glauben に対応し、Nhd. では ou から au へと舌の位置が下がる母音変化が起こる。またこの関係文の中では定動詞 will が文末に置かれ、現代語と同様に副文内での定動詞後置が見られる。

2行目の so は doch をともなって「~というのに (während doch)」という認容の意味を表しており、Knape によるテキストには obgleich という注が付されている。der gschrift so vil では vil (nhd.viel) が名詞的に用いら

れ、der gschrift はこれにかかる女性名詞の 2 格と考えられる。gschrift は die Heilige Schrift(聖書) を意味しており、前つづりの g[e] は「(文字の) 集合」を表しているものと思われる。また 3 行目の jns では、語頭の j が Nhd. の母音 i として用いられており、この題詞 3 行が、will、vil、spil で脚韻を踏んでいる。

verachtung der gschrift 聖書を侮ること

Der ist ein narr der nit der geschrift	信じぬ者は阿呆者
Will glouben die das heil antrifft	幸福にかかわる書物(聖書)を

本文 1 行目文頭の der は現代語の人称代名詞 es に対応し、文中の関係詞 der の先行詞として用いられてここでは強意的構文が構成されている。また nit は nüt と並んで nhd.nicht と同様に「否定」の意味を表すが、nüt はアレマン方言では nhd.nichts を表す場合もあり、この詩集でもある程度の使い分けが見られる。geschrift は glouben の 3 格目的語として用いられており、glouben は話法の助動詞 will をともなって現れている。これらは副文内ではあるが glouben will ではなく will glouben と配置され、韻律の関係からか定動詞 will は後置されていない。glouben に続く die は geschrift を受ける関係代名詞で、これに導かれる関係文内では定動詞 antrifft¹⁾ が後置されており、副文内での定形後置が成立している。geschrift、antrifft で脚韻を踏む。

Vnd meynet das er leben soll	そして(その阿呆は)生きてゆけると思いこむ
Als ob kein got wer / noch kein hell	まるで神も地獄もないかのように

3 行目の meynet では、y が二重母音の一部として nhdi の代わりに用いられている。これに続く従属接続詞 das (nhd.dass) 文の中では leben soll と

定動詞が後置されており、ここでも副文内での定動詞後置が行われている。文末の助動詞 *soll* の不定形は円唇化された *frnhd. sölle(n)* (*nhd.sollen*) と思われ、*soll* はその3人称単数直説法現在、あるいは間接話法による接続法現在で、その場合、語末音 *e* が消失した形と考えられる。*Zarncke* はこの箇所について „*könne*“ という説明を加えており、「可能」の意味を添えている。4行目の *als ob* による副文内では、*kein ... / noch kein ...* という否定文で2つの対象がそれぞれ否定されているが、これは *mhd. neweder* [*enweder*] ... *noch ...*, *nhd. weder ... noch ...* に対応する表現と考えられる。*wer* は *mhd.sîn* (*nhd. sein*) の3人称単数接続法過去 *wære* の語末音が消失した形と思われ、また *hell[e]* でも語末音 *e* の脱落が見られる。*soll*、*hell* で脚韻を踏んでいる。

Verachtend all predig vnd ler 5 あらゆる説教と教えを侮りながら
Als ob er nit sah noch hör まるで見えず聞こえないかのように

5行目の *verachtend* では *verachten* の現在分詞が用いられ、また *predig[e]*, *bredig[e]* (*nhd.Predigt*)、*ler[e]* ともに語末音の *e* が脱落している。4行目に加えて6行目の *als ob* 文内では、*nhd.weder ... noch* に対応する表現として *nit ... noch ...* という組み合わせも見られる。またこの行にはヘービングが3個しかなくクニッテルフェルスが成立しないため、*Zarncke* は否定を強調する „*gantz*“ (あるいは „*gar*“) を挿入して „*Als ob er [gantz] nit sah noch hör*“ という変更を加え、4ヘービツヒの詩行にしている。²⁾ また *als ob* は非現実を表現するため、この副文内の動詞 *sah* については語末の *e* が消失した接続法過去の形で用いられており、また *hör* では *e* が語末音消失した接続法現在の形で現れているものと思われる。ここでは *ler*、*hör* で脚韻を踏んでいる。

Kem einer von den dotten har 死者の誰かがやっ来てれば (現れれば)
So lieff man hundert mylen³⁾ dar 人は100マイルの距離を超えてそこへ走る

7行目文頭の kem は nhd.kommen の接続法 2 式 käme に対応するもので、wenn が省略された仮定的条件文になっている。dotten は nhd.Toten を意味し、Frnhd. では語頭の d が t と競合しており、また har は mhd.her(e), har, nhd.her, hierher に対応する。Zarncke の注釈では「Brant はここで、auch noch eine lebende abergläubische sitte (まだ行われている迷信的な習慣) のことを想定していたのだろう」とコメントしており、死体に話しかけてあの世の様子を聞き出そうとするような風習、習慣を述べているように思われる。8行目の lieff は前行の仮定的条件文に対応して、語末音 e が消失した形の接続法過去で記述されていると考えられ、また dar (mhd.dare, dar) は nhd.dahin, hin に対応し「方向」を意味する。har、dar で脚韻を踏む。

Das man von jm hort nuwe mer 彼から新しいうわさ話を聞くために
Was wesens jn der hellen wer 10 地獄はどんな状況か

9行目の das は nhd.damit に対応し、目的文を導く従属接続詞として用いられているが、この副文内では定動詞の hort (nhd.hört) が文末に後置されていない。hort の目的語 nuwe mer は mhd.niumaere、Nhd. では neue Märe (「新しい知らせ」) となるが、ここでは「興味本位の新奇なうわさ」といったニュアンスかと思われる。10行目の wesens には「状態、特性」、あるいは「生活」といった意味が考えられ、この語が 2 格で was (mhd.waz) とともに用いられて「どのような状況、営み」という意味が表現されている。Knappe によるテキストではこの箇所には was für ein Treiben (「どのような賑わい」) という注が付けられている。in der hellen では helle (「地獄」) に 3 格の弱変化語尾 n が見られ、また nhd.sein の接続法 2 式 wäre に対応する wer (mhd.wære) はこの副文内では文末に置かれ、現代語のように定動詞後置が行われている。mer、wer で脚韻を踏む。

Vnd ob vil lut furend dar jn	そして多くの人々がそこで往来していたか
Ob man ouch schanckt do nuwen win	人はその時新しいワインも酌み交わしたのか

11 行目の lut は mhd.liute に由来し、nhd.Leute のように二重母音化する前の長母音の状態が見られる。これに続く furend では語尾に d が付されているが、これについては mhd.varn (nhd.fahren) の 3 人称複数直説法過去 vouren に、3 人称複数直説法現在 varnt の語尾からの類推で t が付加され、それが無声音化した d で表記されたものと思われる。また dar jn は nhd.darin に対応すると考えられる。12 行目の schanckt は、mhd.schenken (「酌をする」) の過去形 schancte の語末音 e が脱落した語形と見られ、11 行目、12 行目の従属接続詞 ob による副文内ではいずれも定動詞の後置は行われていない。ouch、win ではそれぞれ nhd.auch、nhd.wein のように二重母音へ変化する以前の状態が見られ、この 2 行は jn、win で脚韻を踏む。

Vnd des glich ander affen spil	似たようなほかのサル (愚か者)のお戯れ
Nun hat man doch der gschrift so vil	今や人は聖書の多くの教えを手にしている

13 行目の des glich ander affen は後続の spil にかかる 2 格付加語で、ここではまだ修飾する名詞の前に配置されており、また韻律を整えるため glich、ander には格変化語尾が見られない。14 行目でも der gschrift は名詞 vil (nhd.viel) にかかる部分の 2 格で、前行と同様、修飾する名詞の前に置かれている。ここでは spil と vil で脚韻を踏んでいる。

Von alter vnd von nuwer ee	15 新旧の契約 (聖書) の
----------------------------	-----------------

Man darff kein zugniß furter me 人はそれ以上多くの証拠を探す必要
 はない

15 行目の ee は mhd.êwa, êwe, ê に由来し Nhd. では Ehe に相当する語であるが、ここでは神と人との契約 (Testament) という意味で旧約、新約聖書を指している。またこの語には他にも「永遠、掟、法、権利、慣習、婚姻、信仰」といった幅広い意味合いが含まれている。またこの ee にかかる形容詞 alter、nuwer では、いずれも女性 3 格の格変化語尾が付されている。16 行目の darff は mhd.durfen, dürfen に対応し、本動詞をともなって「～する必要がある (brauchen)」という意味で用いられているが、この darff に対する本動詞の不定詞は次行 17 行目の suchen と考えられ、kein zugniß とともに「～証拠を探す必要はない」という意味が表現されていると思われる。こういった suchen の配置に対して Zarncke は注釈で「ブラントの大胆な構文 (eine kühne construction Brants)」と述べている。Knappe の注釈では „man bedarf keines weiteren Zeugnisses“ (「人はさらなる証拠を必要としない」) という説明がなされ、darff を nhd.bedürfen と解して zugniß を 2 格目的語としている。furter については mhd.vürder, vurder、Nhd. では fürder に対応し、me (nhd.mehr) とともに「さらに、それ以上多く」といった意味で用いられている。また 16～17 行では Nhd. の weder ... noch ... に対応する kein ... noch ... という表現が見られ、16 行目 zugniß と 17 行目 die kappel vnd klusen の双方が否定されている。ee、me で脚韻を踏む。

Noch suchen die kappel vnd klusen 礼拝堂と (修道院の) 独居房も探
 す必要はない

Des sackpfffers von Nickelshusen ニクラスハウゼンの笛吹きの

die kappel vnd klusen は Nhd. では die Kapelle und Klausen と表記されるが、独居室を表す klusen では弱変化語尾が付加され、また Nhd. で au

へと二重母音化される以前の長母音の語形が見られる。これら die kappel vnd klusen に「ニクラスハウゼンの笛吹き」が2格でかかっているが、des sackpiffers は des Sackpfeifers (「バグパイプ奏者の」) を表し、Nickelshusen はタウバー河畔の Niklashausen という村名を指している。1476年、この村に住んでいたバグパイプ吹き (Sackpfeifer) というあだ名の羊飼いの Hans Böhme が、自分に聖母マリアが現れたと言いつらして人気を集め、説教を通じて社会変革を唱えた。ついに武装蜂起を呼びかけたとき、ヴェルツブルク司教の命令で捕えられ火刑となったと言われている。⁴⁾ klusen、Nickelshusen で脚韻を踏む。

Got redt das vß der worheit sin	神は自らの真理からそれを言われる
Wer hie sünd düt / der lidt dort pin	20 この世で罪を行う者は、あの世で苦しみを受ける

19行目の vß にも nhd.aus と二重母音化される前の長母音が見られ、また worheit と nhd.Wahrheit では o と a の母音に変化が生じている。行末の sin は所有代名詞だが、ここでは名詞 worheit の後に付加された形で現れており、この前置詞句を Nhd. で書き換えると aus seiner Wahrheit となり、Knappe の注釈では gemäß seiner Wahrheit という表現が添えられている。20行目の wer は不定関係代名詞で後行詞の der が挿入されており、現代語と同様の用法が見られる。sünd では語末音の e が脱落している。düt は mhd. tuon (「する、行う」) の3人称単数現在に対応するが、母音が ü と表記されておりこれは u の誤記である可能性が考えられる。lidt は mhd.liden (「耐える、甘受する」) の3人称単数現在に対応し Nhd. では leiden と二重母音化され、これと同様に次の pin も、Nhd. では Pein (「苦痛」) へと母音に変化する。sin、pin で脚韻を踏んでいる。

Wer hie sin tag zu wißheit kert	この世で日々知恵と向き合う者は
Der wirt jn ewikeit geert	永遠に尊敬される

行頭の wer は前行と同じ不定関係代名詞で、関係文の副文内では定動詞 kert (nhd.kehrt) が文末に置かれ現代語と同様に定動詞後置が成立している。sin tag での sin は nhd.sein へと二重母音化されておらず、またここでは無語尾で用いられているため、性、数、格の区別が不明瞭である。wißheit についても nhd.Weisheit へ二重母音化される前の長母音が見られ、ほぼ mhd.wisheit の語形で用いられている。22 行目の wirt は文末の geert (nhd.geehrt) と呼応して受動の助動詞として用いられており、Mhd. では wirdet という語形も併存している。ewikeit においては、mhd.êwic-heit と nhd.Ewigkeit との中間段階にある語形が見られる。kert、geert で脚韻を踏む。

Gott hat geschaffen das ist wor	正に神はつくられた
Das sah das oug / vnd horr das or	目は見え、耳は聞こえるように

冒頭の Gott には t が重ね書きされているが、19 行目の Got では短母音の後にもかかわらず t が一つしかなく、書記法の不統一が見られる。23 行目後半の das ist wor (nhd.wahr) は挿入文と思われ、Bobertag のテキストではここがコンマで区切られている。24 行目文頭の das は「目的」を表す従属接続詞で、Nhd. の接続詞 damit に近い用法と見ると文が理解しやすい。この das (nhd.dass) 文内で主語となる das oug (nhd.das Auge)、das or (nhd.das Ohr) に対する動詞がそれぞれ sah (nhd.sähe)、horr (nhd.höre) で、前者は 3 人称単数接続法過去、後者は 3 人称単数接続法現在の形をしており、いずれも語末音の e が脱落しているものと考えられる。sah と hor[r] が同じ文内で用いられた例は 6 行目にもある。23 行目の主文は現在完了、それに続く副文内では接続法過去、現在の両方が併用されているとすると、時制の表現に不安定さが見られる。ここでは wor、or で脚韻を踏んでいる。

Dor vmb ist der blindt vnd ertoubt 25 それ故、盲目で気が狂っている
 Der nit hort wißheit vnd jr gloubt (神の) 英知を聞き入れず信じ
 もしない者は

25行目の ertoubt について Zarncke は、ertaubt (「耳の聞こえない」) ではなく sinnlos (「正気を失った」) という説明を加えている。この詩集の 61 章に見られる „toub“ という語に対しても Zarncke は verrückt, wahnsinnig (「気の狂った」) という解釈を示しており、„toub“ を „taub“ (「耳の聞こえない」) ではなく „toben“ (「荒れ狂う、暴れる」) と関連付けている。それがこの ertoubt の意味にも反映されているものと思われる。26 行目文頭の der は前行の der を受ける関係代名詞と考えられ、この関係文の中では否定詞 nit が、hort と gloubt 両方の定動詞を否定している。また定動詞 gloubt の前に置かれた jr (nhd.ihr) は wißheit を受ける 3 格目的語と見られ、この 2 行は ertoubt、gloubt で脚韻を踏んでいる。

Oder hort gern nuw mär vnd sag さもなくば、新しいうわさや話ばかり
 を聞きたがる
 Jch vörcht / es kumen bald die tag すぐに、そのような日々がやって来
 ることを私は恐れる

27 行目は前行の関係文が継続しているものと思われ、文内の定動詞 hort の目的語 mär、sag にはいずれも語末音の e が消失している。また形容詞 nuw がここでは無語尾で用いられており、28 行目では人称代名詞 nhd. ich の語頭母音が j で表記されている。これに続く定動詞 vörcht は mhd. vörhten, vürhten (「恐れる」) に対応するもので、摩擦音を表す Mhd. の h はこのテキストでは ch で表記されている。vörcht の内容を述べるヴィルゲル以下ではまず文頭の位置を埋める仮の主語 es が置かれ、本来の主語 tag が

したものと思われる。32 行目の wart は受け身の助動詞で、Nhd. と同様に文末の過去分詞 gehört とともに用いられ、Jheremias を主語とする受動文が過去時制で記述されている。lert、gehört で脚韻を踏む。

Des glichen ander wisen me	同じくさらに多くの他の賢者も
Des ging harnoch vil plag vnd we	それゆえ多くの天罰と苦しみが、続いてやって来た

33 行目の des glichen は Nhd. では ei と二重母音化されて desgleichen (「同様に」) と一語で表記され、またこれに続く ander wisen me (nhd. andere Weisen mehr) は 31 行目の Jheremias と並ぶ主語としてここに記されている。34 行目冒頭の des は mhd.des に相当し、理由を表す副詞 deshalb としてここでは用いられ、これに続いて現代語と同様に定動詞 ging が 2 番目に配置されている。また harnoch は nhd.hernach (「そのあとに」) と解される。そしてこの文の主語となる vil plag vnd we (「多くの天罰と苦しみ」) については、紀元前 6 世紀に行われた新バビロニアによるエルサレムの破壊とバビロン捕囚 (die Zerstörung Jerusalems und die babylonische Gefangenschaft) のことと、Zarncke、Bobertag いずれのテキストにおいても指摘されている。この 2 行は me、we で脚韻を踏んでいる。

以上、ブランドの『阿呆船』第 11 章のテキストについて語学的な整理を行った。語法的に Nhd. に近づいていると思われる半面、同じテキストの中でも gschrift – gschrift – geschriff、mer – mar、hort – hört、hor – hör などのように書記法に乱れがあり語形が安定せず、また語末音消失等もあって文法的な解釈が困難な部分が多い。しかしこういった語学的な整備よりブランドが優先したのは、クニッテルフェルス (Knittelvers) で書かれた韻文としての韻律であったように思われる。

注

- 1) Knappe によるテキストでは betrifft という注釈が付され、前つづりを置き換えて表現されている。動詞前つづり an- と be- に共通する機能があることがうかがえる。
- 2) Bobertag によるテキストにもこの変更が反映されている。
- 3) grosse entfernung (Zarncke)
- 4) Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Übtg. von H. A. Junghans. Hrsg., Anm. u. Nachw.: Mühl, Hans-Joachim. Stuttgart 1964. Bibliographisch ergänzte Ausgabe 1992. (Universal-Bibliothek Nr. 899) S.45.

主な参考文献：

- Baufeld, Christa: Kleines frühneuhochdeutsches Wörterbuch. Tübingen 1996.
Ebert / Reichmann / Solms / Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1993.
Götze, Alfred: Frühneuhochdeutsches Glossar. 7. Aufl. Berlin 1967.
Grimm, J. / Grimm, W.: Deutsches Wörterbuch. 33 Bde. Leipzig 1854-1971. (dtv 5945)
Hennig, Beate: Kleines Mittelhochdeutsches Wörterbuch. 6., durchgesehene Aufl. Berlin / Boston 2014.
Koller, Erwin / Wegstein, Werner / Wolf, Norbert Richard (Hrsg.) : Neuhochdeutscher Index zum mittelhochdeutschen Wortschatz. Stuttgart 1990.
Lemmer, Manfred (Hrsg.) : Das Narrenschiff. 3., erw. Aufl. Tübingen 1986.
Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch. Band I,II,III. Stuttgart 1992. (Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1872-1878 mit einer Einleitung von Kurt Gärtner)
Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 38. Aufl. Stuttgart 1992.
Paul/Wiehl/Grosse: Mittelhochdeutsche Grammatik. 23. Aufl. Tübingen 1989.
Wagenknecht, Christian: Deutsche Metrik. 5., erweiterte Aufl. München 2007.
伊東泰治、馬場勝弥、小栗友一、松浦順子、有川貫太郎編 『新訂・中高ドイツ語小辞典』 同学社 2001年
荻野蔵平、齋藤治之 『歴史言語学とドイツ語史』 同学社 2015年
工藤康弘、藤代幸一 『初期新高ドイツ語』 大学書林 1992年
古賀允洋 『中高ドイツ語』 大学書林 1995年
古賀允洋 『中高ドイツ語辞典』 大学書林 2011年
ゼバスティアン・プラント著 尾崎盛景訳 『阿呆船 (上)(下)』 現代思潮社 1968年
藤代幸一、岡田公夫、工藤康弘 『ハンス・ザックス作品集』 大学書林 1983年
山口四郎 『ドイツ韻律論』 三修社 1973年